

Title	地球と彗星の衝突
Author(s)	長田, 政二
Citation	天界 = The heavens (1933), 13(145): 174-177
Issue Date	1933-04-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/162352
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

地球と彗星の衝突

在 米 長 田 政 二

此一文は北米加州ロスアンゼルス市にて發行するロスアンゼルス・タイムズ新聞の日曜附録にあつた北米印度人研究家 アーネスト、ヴァイ、サットン (Ernest V. Sutton) なる人が、アリゾナ隕石坑を中心に直徑450哩の圏内にあるインデアン (Cliff Dweller) の廢墟數十ヶ所を實地踏査研究の結論を借りて綴り合したもので、原文には米國の有名な多くの科學者の名と研究の例證を上げ、モ少し委しきものでありましたが、煩雜を恐れ骨子だけにしたものであります。

北米合衆國アリゾナ州の北部高原に、アリゾナ隕石坑と呼ばれるゝ有名な隕石坑がある。此の坑の縁邊は周圍の地よりも約130呎の高さあり、深さ600呎、一方は斜に、他方は切り立ちたる卵形のものにて、多くの學者の研究と數回の穿孔により、直徑400呎、重量10,000,000乃至12,000,000噸と云ふ一大隕石が落下突入し、約400,000,000噸の土砂頁岩を押し上げ、縁邊より1哩内外にて、深さ1,000呎の所に埋没して居ると云はれて居る。一部研究家は、之れを有史以前の出來事と稱すれども、仔細に、坑の内壁を調べ、風雨に浸蝕されし跡を見ても、數世紀以前に出來たと云はるゝ他の隕石坑に比して、決してそれより以前に出來たものとは思はれない。

1908年6月30日、シベリヤの奥地に、一大隕石が落下した。露國の地理學者クリク (Kulik) 氏が、其の地方の第三回目の實地踏査の報告によれば、此の隕石は小に見て12噸、大に見て130噸位のものにして、其落下地點を中心に、大凡100哩圏内の森林の木と言ふ木は、車輻の如く落下地點に向つて薙ぎ倒され、枝や葉は引き千切られ、熱風の爲に焦され居り、其地より400哩南方の鐵道線路を進行中なりし、汽車の機關手は、其震動を列車の脱線と思ひ誤り、進行を止めたと曰はれ、2,700餘哩のチフリス市、3,240哩の獨逸のイナ市等にては、地震としてレコゞドされ、英國の六つの觀測所にては、其震動が20分も繼續したと記録され、隕石の怪光が、ロンドン、コペンハーゲン、柏林、キ

ンナ市等にも観測せられ、グリニチ天文臺にては、其の光を撮影したとの事である。又隕石落下地點より100哩以内の唯一つのヴァノヴァラ (Vanovara) と呼ぶ小驛では、家の窓と言ふ窓のガラスは盡く打ち破られ、室の一方の隅に置かれたロシヤ・ストロブの重き蓋が、他の隅に飛ばされ、馴れたトナカイは、野獸の如く狂奔し、此の小驛は一時土煙に掩はれし程の激動と、恐怖を感じたとの事である。

僅かに12乃至130噸大の隕石落下にても、斯の如き破壊と激動を生ずるとすれば、アリゾナの隕石坑を作つた重量12,000,000噸もあると言はるる、白熱したる一大鐵塊が、秒速40哩と算せらるる速度を以て落下突入せし時の、震動破壊の如何に大なりしかは、筆舌では到底表はし得ぬ事であらう。

今より大凡六世紀半以前、アリゾナ州にインディアンの文明が榮えて居つた處が恰も一瞬の間に此の文明が絶滅して終つた。此れは世界の歴史上に於ける最も不可解なる出来事の一つである。其の廢墟の中には現今でも、彼等の使用せる武器、土器、或は穀物などが發見されつつある。又、座したまま壁によりかかりたるミイラが屢々發見せられる。或廢墟の内に見出されしものなどは、二人の老人が壁によりかかりしままミイラとなり、その前には子供のミイラが横はり、土器石棒などが取り亂されて居り、附近に落ちた壁土の下から、穀物の入物などが見出され、其様は丁度子供を遊ばせながら、料理をしつつあつたかの如きものであつた。

斯の如き有様は、蒐集家や獵奇家が、他に持ち去らぬ以前には到る所の廢墟に見られたものである。インディアンの建築は泥土或は煉瓦様のものを主とし、天井に大木を渡し泥を以て掩ひ屋根としたもので、耐火建築とも曰ふべきもので、容易に火災に逢はぬ筈であるが、此等廢墟内の材木は悉く半ば焦げ、或は炭となつて残されて居る。

合衆國ナショナル博物館の N. M. ジュド氏は、此等の材木の木理から推算して、或建物は西曆1275年頃に建てられ、其後火災の爲に焼け滅びたと云ひ、アリゾナ大學附屬天文臺長ダグラス博士の重要な年代決定の研究も、此等40ヶ所の廢墟の内の、土で埋まつた焼け焦げた材木、或は炭となつたものの木理より推算したもので、ホワイトハウス、ブイプロ 其他多くのものは、

1275年代の伐木にて建築され、ベタテキンにては1277年代に、タキヒル・ブエプロにては1278年代の伐木建築をなせしが、其後突然伐木と建築とが中止せられたとの事である。

其後再び1370年代にはオライビにて、1427年代にはワルビ等にて伐木と建築とが初められた。然し此れは異つた種族のインデアンにして、彼等の使用せし土器、器具の着色などを見ても、容易に異種族なる事を見分け得るとの事である。

歴史家は此等のインデアンは早魃或は他の不明の事情にて、他の地に移動したものと信ずれども、彼等が使用せし日常の器具は勿論、穀物までも残せしまま移動を企てし理由が認められない。

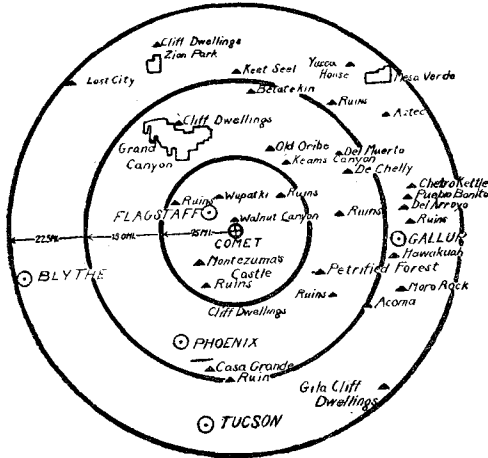
曾てサンタクララ、インデアンがプイ、フリホリの地を捨て、他に移住した事があつたけれども、彼等の住みし跡に何物も遺棄して置いたものが無かつたにもかかはらず、此所アリゾナの隕石坑を中心に450哩の圏内にある數十ヶ所の廢墟には、彼等の使用せし武器、土器、祭祀の器具或は多量の穀類迄も遺棄されて居つたのである。

此等の状態例證を綜合して、インディアンの末路を考察すれば、それはアリゾナ隕石坑を作りし、一大隕石の落下猛撃の爲、一時に絶滅したものと見るべきが至當では無いだらうか。彼の舊約全書にある、「天の業火により滅ぼされた」と云はるるソドムとゴモラの如き事件が、此所にも繰り返されたものなのであらう。然も夫等ミイラの多くは老人、子供なるより見れば、壯者は獵に出で、婦女子は野を耕しに出でし、日中の出来事と見るべきであらう。

廣茫450哩を焦土となし、一民族を絶滅せしめたる、重量12,000,000噸、直徑400呎に及ぶ白熱したる一大鐵塊！隕石！否彗星の核では無いだらうか？一大隕石の落下にあらずして、一小彗星と地球との衝突！此れが至當の見解では無いだらうか。

今當時の有様を追憶すれば、一彗星が恰も巢を出でし蜜蜂の女王に隨ふ無數の働蜂の如く、夥びただしき流星群を従へ、東北の天より一瞬時に北米の野を横ぎり來つて、此所アリゾナの高原に於て地球と衝突し、其の核は地殻を破つて衝突地點より1哩、深さ1,000呎の所に埋没し、此れに隨ふ流星群は附

近數哩の地に散亂し、衝突の刹那の激動と、核を包圍せし瓦斯の高熱壓の爲め衝突地點を中心に450哩の圏内の、あらゆるものを破壊し、焼き盡くし生きとし生けるものを絶滅せしめたのである。



E. V. Sutton 氏作の左の地圖はアリゾナ州に衝突した一彗星が毒ガスを225哩までも擴がらせたことを示す。

又此圏内の山々に大きな地割れがある。此の割目が盡く隕石坑に向つて開かれてあるを見ても、衝突の激烈さを物語るものである。

而して此の壯絶悲絶なる地球と彗星の衝突は、彼の伐木、建築の突然中止されたる1278年にして、今より實に654年前の事であつたらう。（1932年12月稿）

山本會長の外遊順路は？

別記の如く、今回わが山本會長は學術研究會議及び京都帝國大學よりの代表として汎太平洋學術會議に參列のため渡米されることとなつたが、之れについて、或る三人の親切な友人が、それぞれ最も望ましいと思ふ外遊順路を考案して會長に薦めてゐられる。それは

A 案 ボクトリヤ、バンクーバー兩地の會議が終つたならば、カリフォルニアを一巡して、すぐ歸朝すること。

B 案 會議後、シカゴ、トロント、オタワ、ボストン、ニウヨーク、フィラデルフィア、ワシントン等を歴訪の後、ニウヨークから乗船、パナマ運河とロスアンゼルスを経て歸朝すること。

C 案 會議後、シカゴ、ニウヨークを経、大西洋を渡り、マラガ、ゼノア、ゼニス、プリンデシ、アテネ、イスタンブール、エルサレム、ポルトサイド、コロンボ、シンガポアを経て神戸に歸着すること。

時間と旅費の都合で、山本氏は果して何れの案を實行されるやら、——只、刻々送られる旅中通信のみが物語るであらう。（編輯子）